

子どもらに支えられて

安部富士男

「園長先生、ハンサムだよ」

大寒の 野明かり海に 紺流す

ふじお

(以下「ふじお」は省略)

蒼天に 岬突き出て 風花す

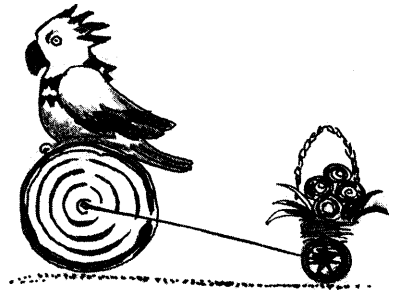
虹消えて 冬海の藍 深まりぬ

新年を迎えると私は家族で海を見にでかけます。海を見つめながら、多くの子どもとの様々な出会いを思い出

し安部幼稚園創立以来の実践を振り返って、厳しい状況のなかで幼稚園教育経営の危機を一つ一つ克服し現在を迎え得ているのは、この子どもたちのお陰と感謝します。

ある寒い日のことでした。二日間、私立幼稚園関係の研究会で講演するために園を留守にした翌日のことです。

「二日も、子どもたちの顔を見ることができなかったから、今朝こそ登園するところから子どもたちを迎えて、一人一人の表情をしっかりと汲み取ろう」と薄いジーンズのままて園庭に飛びだしました。門から三メートル



ほど離れたところに屈んで、門から入ってくる子どもたちを迎えていました。美智子はしゃがんでいる私の背中に登って自分の頬を私の頬に擦りつけながら「園長先生のほった、ザラザラだ」とつぶやいています。翌は、後にそっと廻ってきて、ピシヤリと私のお尻を叩き「園長、痛いだろう」と保育室に駆け込んでいきました。私が「おはようございます」と言っても応えもせず、下を向いたまま素通りすると、母親が「園長先生がせっかく声を掛けて下さったのに御免なさい」と寄って来ました。私は「挨拶してますよ。お母さんから見えなかったかも知れませんが、下を向いたままですが、頬に可愛い笑窪を浮かべていました。その笑窪が挨拶です。やがて、その気持ちを言葉で表現するようになるでしょう」と応えていました。

九時十五分になって門係が戸を締めてから、やや遅れて隆典が登園して来ました。「隆ちゃん、おはよう」と声を掛けると、門から入って来た隆典は私の前にびたりと立ち止まり、私の顔をしげしげと見上げながら「園長

先生、ハンサムだよ」と言います。私は「隆ちゃん、園長先生はハンサムじゃないんだからハンサムって言わないで。ハンサムじゃない人はハンサムと言われると恥ずかしいんだから」と応えると、「だって、今朝はハンサムだよ」とハンサムという表現にこだわっています。「どうして今朝はなの」と問い返すと、「だって、今朝ね、半分、寒そうだよ」と言います。その言葉に初めて隆典の言わんとすることに気づいて「本当だ。園長先生は薄いジーンズで庭に出て来たから寒いんだ」と応えると、隆典は「風邪ひくから厚いジーンズを着ておいで」と心配そうな表情で私を見つめていました。私は、思わず、隆典を抱き寄せ「ありがとう」と言っていました。

こんなやさしさに支えられて、私は、今を生きている子どもたちに感謝しています。今年も、また、この園庭で新しい出会いに恵まれると胸がときめきます。

「寒いのに小さな蝶ちゃんが飛んでいる」

それまで砂山を作って遊んでいた典子が、ふと、空を

見上げると青空から風花が降りていました。「あっ！園長先生、見て。寒いのに小さい蝶ちょが飛んでいるよ」と典子が風花を追いつ始めると、砂場で遊んでいた子どもたちも一斉に風花を追いつ始めました。その時、私の胸に

風花や 小さき蝶よと 子ら追いつゆく

という句が浮んできました。

その日の午後、お帰りの時間に兎係が「シロが元気な
いよ。明日、キャベツを持ってくるけど、園長先生も後
で見つおいて」と言つて帰つていきました。研究会から
戻つて、園庭に出ると、満月が天心に迫り、花壇の菊の
香りがあたりに幽かに漂つています。

寒菊に 月のしづくの 真白なり

山羊牧場では、兎のシロたちも元気で、満月の明るさを
楽しむかのように群れて跳び上がったいました。

寒月の ほのおとなりて 兎舞う

子どもとの約束を覚えていて、夜半に庭に出て良かつ
たと思つました。

子どもたちと、園外保育に出つ時のことです。冬なの
に、菊日和のように、空が暖かく晴れ渡つていました。
しばらく、おしゃべりを楽しみながら団地のなかを歩い
てみると、突然、幸子が「あっ！ばらが咲いてる」と
叫びました。見上げると一輪のばらが咲いていました。
いのちが溢れそうなつばみもきれいでした。私のなかに

蒼天に ばらの花咲く 響きあり

青空に 冬のばら咲く 響きあり

という二つの句が誕生してました。園外保育から戻つ
て、子どもたちのことばをノートに記録している間も、

つぼみの姿が胸に浮かんで離れません。ノートの隅に

冬ばらの つぼみ固むる 天ぬくし

しずかなる もの天にあり 冬のばら

という昔の句をメモしておきました。

「園長先生、森に探険に行こう」と、子どもたちに誘われて一緒に丘の上のグラウンドに登っていくと、林檎の木立の間で雀が黒ぐろとした土に影を落して餌を啄んでいました。雀を見て、二十歳の頃の句

使徒のごと 旭の影を曳き 寒雀

を思い出していました。

私たちは、今年も、また、自然のなかで四季の恵みに従いながら、豊かな遊び・仕事のある生活を築き、子どもたちとともに充実した毎日を送ろうと念じています。

「赤ちゃん山羊に会いたいな」

年長組の山羊係が、山羊のやっちゃんの赤ちゃん誕生を心待ちにしていたのに予定日がくるって、卒園式ばかりか、入学式になっても未だ生まれませんでした。

卒園式が終わると、数人の山羊係が牧場にやって来て、名残惜しそうに山羊の背中を撫でながら「餌をよく食べろよ」「風邪をひくな」「腹をこわすな」「丈夫な赤ちゃんを生むんだよ」「また来てね」などと話しています。光一は、私をしっかりと見据えて「園長先生、山羊の赤ちゃんがうまれたら教えて」と話して門を出ていきました。

子どもたちが去った後、静かになった園庭の牧場の周辺を散策しながら、子どもたちの姿を思い起こして

山羊の背を 小さき手で撫で 卒園す

という句を口ずさんでいました。

私の場合、子どもたちの思い出は四季それぞれの美しさを見せてくれる園の自然と深く結びついています。

園庭では、毎年正月早々に支那満作の花が咲き、満作の花の色があせ始める一月下旬から二月、三月にかけて、小梅、豊後梅、こぶし、白木蓮、更木蓮、さんしゅゆと様々な木々が花を楽しませてくれます。雑木林の外縁の草原では、スマイレヤフデリンドウも可憐な花をつけます。

園庭の雑木林の芽吹きも心打つ風景です。

こぶしの芽 光りて天に 力満つ

子等登る 桑木芽吹きて 空やさし

木の芽道 子らの肩越す 風新らし

子らと仰ぐ 天に声あり 木の芽無数

山羊追うや 子等に木の芽の 天光る

四月二十日頃、待ちに待った山羊の赤ちゃんが生まれ、学校から帰る途中に幼稚園に寄った光一は、大きな目を一層大きくして、生まれたばかりの赤ちゃんを見つめて、両手を大きく広げ「園長先生、山羊の赤ちゃんは、こんなに大きな卵から生まれたんでしょう」と聞いてきました。「園長先生が来た時には、赤ちゃんがよろよろしながら歩いていたよ。生まれるところは見なかった」と応えると「じゃ、卵の殻があったでしょう」と問いつめてきました。「殻も見なかったよ」と言うとお母さん山羊が食べちゃったんだ」と二人で納得していました。光一は、山羊係の前はチャボ係で、卵からヒヨコが生まれた後、母鶏が卵の殻を啄んでいるのを印象深く見ていたのでしょう。その体験から、光一らしい判断を下していました。脇にいた五歳児が「赤ちゃんがお母さんに似ていない」というので、「どうして」と尋ねると「お母さんは全部茶色なのに赤ちゃんはおでこのとこ

ろが白い」と答えていました。光一の隣に立たずんで、さっきからの話に耳を傾けていた四歳児が、「だって卵をおでこで割って生まれたからおでこが白いんだ」と断言しています。

子どもたちの姿は、豊かな感性・感情、意欲に裏打ちされて、考える力が発達していることを教えてくれます。

私たちは、自然との出会いのなかで、子どもたちが、豊かな感情体験を味わい、そこでの発見を仲間と伝え合いながら、自分の考えを確かなものとしていくことを大切にしています。

子どもたちのものの見方、感じ方、考え方、表現の仕方、行動の仕方を、生活のなかで深く捉え、一人一人の内面に寄り添った保育を、教職員と力を合わせて築き、感性・感情、意欲の系の発達と認識、操作の系の発達とを結びつけ、人格の発達を豊かに促していきたいと願っています。

同時に、地域に根ざす幼稚園づくりを進めながら、子どもたちとともに園生活を楽しむことができるのは、園長・

経営者、父母と力を合わせ、わが子を生み育てながら、保育に精進している教職員のお陰と感謝しています。

女教師の 白息太く みごもりぬ

教師たちやお母さん方と一緒に四季折々の幼稚園の森を散策することが私の大きな楽しみの一つです。

夏草の 騒音天に みなぎりぬ

柿もぐや 梢に空の 澄みゆけり

蒼天負いて 大根曳く子の 影靴し

教職員も子どもたちも、ともに幼稚園生活を楽しくしながら、悔いのない人生を送ろうと念ずる今日この頃です。

(安部幼稚園)